

自殺防止において薬剤師が果たせる役割（第8報）

○畠中 岳¹, 奥野 純子², 岸本 桂子³, 福島 紀子³（¹薬局すばる, ²筑波大院, ³慶應大薬）

【はじめに】演者らは、地域における薬剤師活動と自殺との関わりについて報告してきた。今回は、自殺の完遂事例と防止事例を対比し、自殺防止における薬剤師の役割を報告する。

【自殺の完遂事例】対象者は、精神障害などのため介護老人福祉施設のショートステイを長期利用されていた。施設のスタッフ・主治医・薬剤師らとの関わりにより状態が安定し、遠隔地のグループホームへ転居となり、薬剤師らとの関わりはグループホームへ引き継いだ。しかし、生活様式や金銭などの問題から退去し、家庭内外での孤立から自殺を完遂された。

【自殺の防止事例】要介護者は、居宅に愛着があり、訪問介護などを利用して独居生活してきたが、度重なる転倒や誤薬などの不具合が散見されていた。遠隔地の家族は、引き取ることを考えたが、要介護者の居宅への愛着や長男の嫁との不和などから実現できないでいた。そのような中、計画的な薬剤師の関わりの依頼があり、居宅療養管理指導を通じて、演者は要介護者や家族らと信頼関係を築けた。特に、対象者となる長男の嫁は、初めて悩みなどを吐露でき、要介護者や家族らからの孤立感に基づく自殺企画などの気持ちを表すことができた。そこで、独居困難となる冬季に家族宅へ引き取ることを計画し、信頼関係を築けている演者が、遠隔地となる家族宅へ通い、対象者・要介護者・家族らを、居宅療養管理指導を通じて取り持った。これらから、要介護者や家族らの理解を深め、対象者の切迫した気持ちを整理でき、要介護者の転居を実現できた。

【考察】各事例の共通のキーワードとして孤立があげられ、薬剤師本来の業務に信頼を得た上で心身ケアに関わることは、潜在的に求められる職能と考えられた。